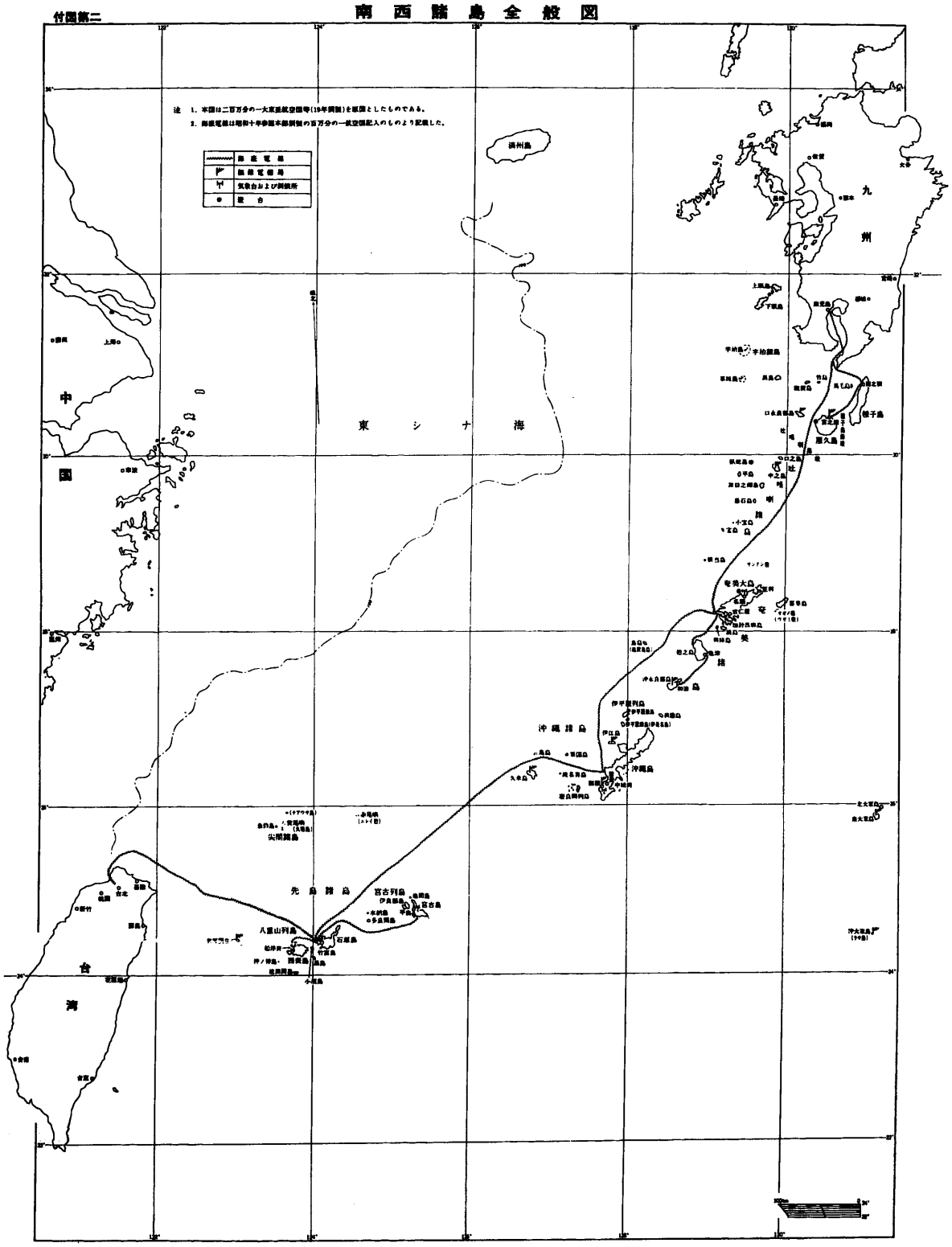
沖縄
305

編者 先島[illegible]刊行会 瀬名波 栄

付図第二

南西諸島全般図



軍事極秘（職員ニ在リテハ軍事秘密ト）

宮古島北部

宮古島地区防禦配備図

軍隊区分

北地区　独立混成第59旅団（司令部位置添道）
歩兵第30聯隊（本部細竹）ほか配備部隊

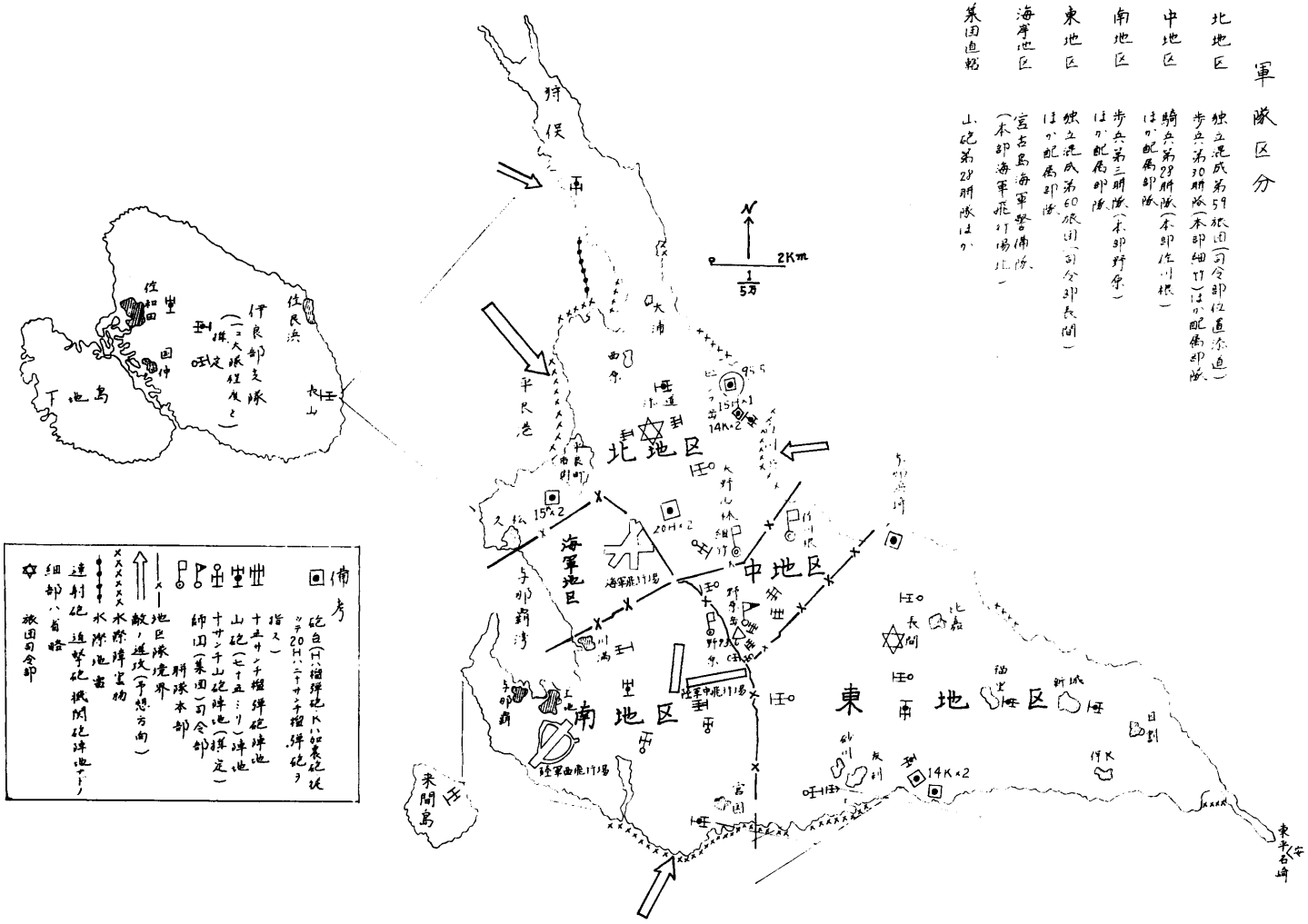
中地区　騎兵第23聯隊（本部佐川根）
ほか配備部隊

南地区　歩兵第三聯隊（本部野原）
ほか配備部隊

東地区　独立混成第60旅団（司令部長間）
ほか配備部隊

海岸地区　宮古島海軍警備隊
（本部海軍飛行場北）

第5師団直轄　山砲第23聯隊ほか



太平洋戦争記録

先島群島作戦（宮古篇）

目次

序　まえがき　凡例　宮古島案内

第一部　作戦準備から終戦迄

第一章　連合軍の攻勢と先島群島の防衛……一―九
(1) 航空決戦に備えての飛行場設定　(2) 先島守備隊の配備　(3) 満州から大兵力転用
(4) 長少将の現地視察　(5) 歩三、騎二十八連の海上輸送　(6) 先島守備隊を改編強化
(7) 独混第五十九・六十旅を増加配備　(8) 軍首脳の往来踵を接す

第二章　敵の企図判断と作戦準備……九―一五
(1) 六航軍・先島方面来攻を予想　(2) 陣地戦を想定、火力配備　(3) 野重第一大隊の輸送
(4) 衛生部隊の臨戦準備　(5) 水上特攻艇隊の配備　(6) 航空部隊の展開

第三章　防衛方針水際作戦に……一五―一九
(1) 攻むるに易い宮古島　(2) 北、南地区を重点防衛　(3) 軍隊区分

第四章　初空襲の洗礼……一九―二一
(1) 敵機の独り舞台　(2) 台湾沖航空戦

第五章　敵来攻前に守将更迭……二一―二三
(1) 師団長、参謀長相次いで転出

第六章　敵機動部隊、沖縄狙う……二三―二六
(1) 沖縄軍、敵の新作戦警戒　(2) 集団、戦斗準備下令　(3) 最後の輸送船も海底の藻屑に

第七章　沖縄戦幕明け……二七―三〇
(1) 連続空襲始まる　(2) 特攻の戦果あがる　(3) 飛行場防衛に全力傾注
(4) 中飛行場上空にて初空中戦　(5) 宮古島から沖縄へ兵力増援を企図

第八章　全島を震撼せしめた艦砲射撃……三〇―三三
(1) 英東洋艦隊出現　(2) 来、宮古島攻略作戦中止　(3) 先島集団を第十方面軍直轄に
(4) 乙戦備下令、兵力を集結　(5) 六月も空襲さかん

第九章　敵上陸の危機遠のく……三四―三七
(1) 長期自給体制を確立　(2) 給与状況、全般に悪化

第十章　終戦……三八―四〇
(1) 停戦協定成立　(2) 萬感胸に満つうちに軍旗奉焼　(3) 納見中将、降伏文書に調印
(4) 戦火の犠牲軍官民およそ三千名　(5) 慰霊碑の建立

第十一章　納見中将の自決……四一―四四
(1) 戦犯出頭を前に　(2) 復員急ピッチで完了

第二部　記録篇（雑録）

第一章　宮古島戦犯事件……四五―四六
(1) 米軍飛行士を処刑

第二章　精強皇軍の裏に……四七―四八
(1) 国軍未曾有の不祥事件（平良町瓦原事件）乱酔将校三名を斬殺　(2) 船舶工兵隊の集団逃亡事件
(3) 上官侮辱で懲役三年　(4) 終戦後も軍事法廷

第三章　英太平洋艦隊の先島群島作戦……四八―五一

第四章　米軍記録　南西諸島の日本軍降伏……五一―五四

第三部　地元官民の活動

五五―六〇
(1) 戦災を避けて島外疎開　(2) 軍官民の決戦態勢強化　(3) 行政機能マヒ状態に
(4) 軍に植ついた警察署長　(5) 女学生は特志看護婦へ　(6) 家畜増産へ暁天動員
(7) 食糧、辛うじて最低維持　(8) 商業活動はストップ　(9) 海上交通は軍輸送船に依存
(10) 宮古島スパイ事件

(付録)
(1) 先島集団、海軍警備隊（宮古関係のみ）将校職員表（第二十八師団以外は主要将校のみ）
(2) 冥友録　(3) 先島群島作戦年表、御協力者芳名、あとがき

序

第二次大戦を通じ最後の陸上決戦場となった沖縄島での戦いについては戦後関係者によって幾多の公刊記録乃至は戦記・体験記などが発表され、その全貌は広く人口に膾炙、語り伝えられて余すところがない。然し戦斗の焦点外に置かれた先島方面の作戦については殆どその機会に接しない。

およそ沖縄戦の全貌を的確に解明し、その意義を究めんとせば本作戦の支とう的役割を果した先島群島作戦を除外することは必ずしもその主旨に副うものでないと信ずる。本書は斯かる観点に立って企画編さんされたものである。

まえがき

一、本書は太平洋戦争の末期・先島群島防衛に任じた先島集団（海軍関係部隊を含む）の作戦準備及びこれに基く各兵団・部隊の作戦行動について、その主力が所在した宮古地区に関する部面を主に記述する。

二、本書は一九六六年（昭和四十二年）刊「宮古島戦記」の不備を補い新たなる資料に基いて記述し直したもので、ある意味に於ける先島群島作戦の集大成版とも云うべきものである。

三、本書は防衛庁戦史室保管の公式記録を軸として関係者（主として大隊長クラス以上の旧将校）の回想・資料を綜合して正確・詳細を期した。更に当時の状況を再現するため能う限り多くの写真を収録して迫真性を持たせた。

四、地方官民の作戦協力・非戦斗員の動きなどについては関係者の多くが物故し、且資料乏しきため、全貌把握が難しく、従って当該部分は断片的部分的記述に止まった。

五、本書が太平洋戦争史一篇となり得ば望外の幸いであり、後世に資することを念願するものである。

六、終りに臨み本書を先島群島作戦に参加・武運拙く護国の鬼と化した軍官民数千名の英霊に捧げ、その冥福を祈るものである。

昭和五十年六月　著者しるす

（付記）なお本書の編さんにあたっては第二十八師団参謀杉本和朗氏に生前御指導頂いたので、同氏のお芳名を借用させて頂いた。御遺族の御了承をお願いする次第である。

凡例

一、日時は主に日本中央標準時刻によった。

一、長さを示すにキロメートル、センチメートル、重さを示すにトン、キログラムなどを併用した。

一、一部に旧仮名遣いを使用した。

一、一部に部隊符号（Cは歩兵聯隊、Kは騎兵聯隊）を用いた。

一、日本軍の聯隊などの固有名詞には「聯」の字を用いた。

一、将校氏名の下の数字は陸軍士官学校卒業期別、少尉候補生期別、特別志願将校期別を示す。（准50）は予備役から現役に編入されたもので、（准50）は陸士50期に准ず。見士は見習士官

一、年号については戦前の部は昭和、戦後は西暦を使用した。

（註）資料の出所によって兵員数、日時などにくい違いがあるが、そのまま加筆訂正せずに掲載した。

宮古島案内

宮古群島は沖縄本島の南西およそ三百キロ、東経一二五度十五分、北緯二十四度四十八分に位置する大小八つ（宮古島・伊良部島・下地島・池間島・大神島・来間島・多良間島・水納島）より成っている。宮古島の面積はおよそ一四八平方キロで沖縄本島のおよそ八分の一、石垣島よりはやゝ小さい。島の形は三角形をなし、島全体がサンゴ礁より成り平坦で山らしい山はない。最高峰野原岳は標高一〇八米、山と云うより丘にひとしい。従って森林に乏しく、川らしい川もない。

年間の平均気温は十六度、真冬でも十度から下ることはない。六月から九月まで夏場の平均気温は二十七、三度でかなり暑いが、年間二千ミリの降雨があり、雨量は多い。夏には屢々台風に見舞われることが多い。

人口はおよそ六万人（戦前は七万人を上回ったこともある）、最近過疎化の傾向が著しく、漸減の一途を辿っている。行政区画は一市二町三村（平良市・城辺町・下地町・伊良部村・上野村・多良間村）で沖縄県庁の分庁である宮古支庁のほか、国、県の出先機関、学校などが平良市に集中している。

産業は砂糖産業が旺んで、ほかに上布、海産物、農産加工品などの産業も活発だが、最近は観光開発にも力が入れられている。

本島は海と浜辺が美しく特に与那覇前浜は真白い砂浜と澄んだ海、そして沖合はサンゴ礁で取りかこまれた自然のビーチを形成して海水浴場に適し、絶好の観光地をなしている。

島の特産として宮古上布・さんご細工・べっ甲・黒糖・貝殻製品などが有名。観光みどころとしては豊見親（とみや）墓、人頭税石、湧水（はりみず）神社、熱帯植物園、パイナガマ、東平安名（ひがし（へんな）崎（サンゴ礁の断崖岬）サンゴ礁の海中風景など。又島の中央にあたる野原越には旧日本軍が建立した陣歿勇士の碑、軍馬などを祀った軍役動物の碑、納骨堂（陣歿将兵二、四〇九柱を祀る）などを納めた霊地があり、さらに昭和四十二年には南方同胞援護会の助成金で建てられた豊旗の塔（平良市袖山）や佐賀県の篤志家野口退蔵氏が自費建立した慰霊碑（野原越）などがある。

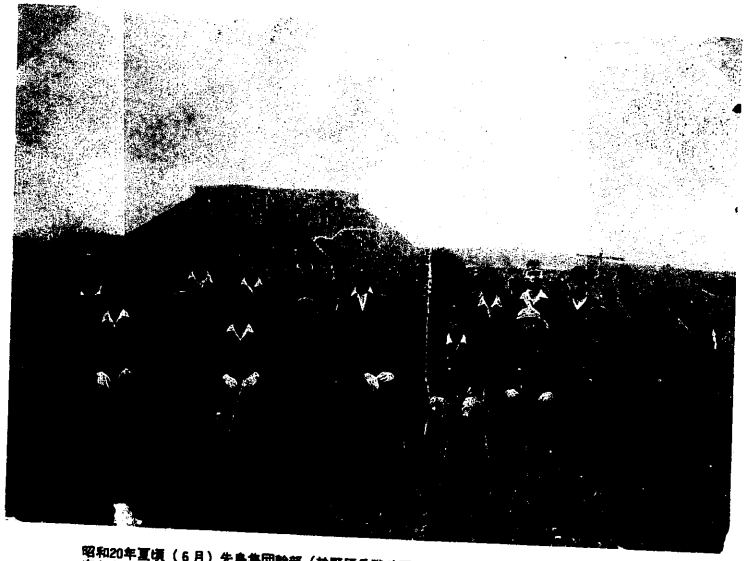
陸上交通機関としては全島主要幹線に乗合バスが運行、ほかにタクシーが利用されている。宿泊施設は観光協会指定のホテル、旅館が三十二軒、予約なしでも利用出来る。又ユースホステル、民宿などの設備もある。宿泊料はホテルが一泊三千円より八千円迄、旅館が一泊二食付千七百円より三千五百円迄（料金は昨年五月現在。その後若干値上がりしている）

那覇との交通は南西航空の旅客機（六十四人乗り）が一日七往復しており、極めて便利である。運賃は大人（十二才以上）一人六千七百円（往復券一万三、四〇〇円）所要時間はおよそ五十分、又海上便は琉球海運の貨客船ひめゆり丸（二千六百トン）が月間十航海、乗客定員は六百八名で、運賃は大人特一等五、〇六〇円、一等三、三八〇円、特二等二、七〇〇円、二等一、六九〇円（所要時間十時間）この外有村産業の貨客船八汐丸も就航、交通は至って便利である。

第三十二軍の陣容（昭和十九年十月頃と推定）

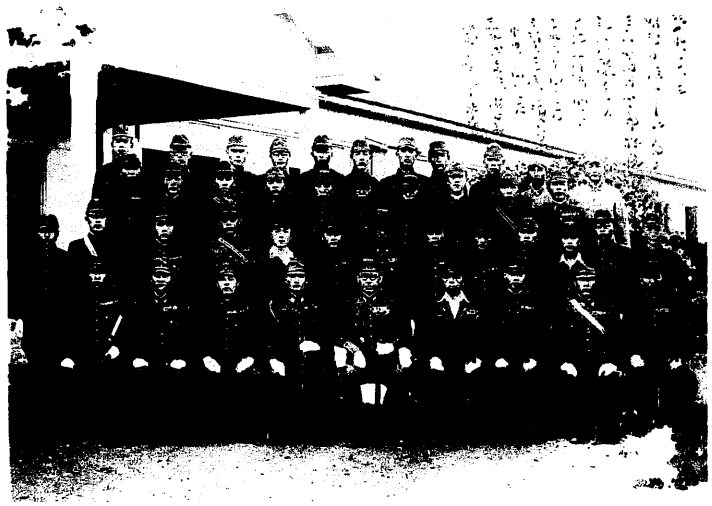
前列向って左二人目から　軍参謀長長勇　歩兵六十四旅団長有川圭一
第五砲兵司令官　和田孝助　第二十四師団長雨宮巽　第六十二師団長
本郷義夫　軍司令官牛島満　第九師団長原守　沖縄方面根拠地隊司令
官　秋葉孝造　歩兵第六十三旅団長中島徳太郎　独立混成第四十四旅
団長鈴木繁二

２列目左端軍参謀高丸兼敬少佐（４人目）同八坂繁広少佐（６人目）第24師団参謀長木谷義雄大佐　第62師団参謀長上野貞臣大佐　軍高級参謀八原博通大佐　第９師団参謀長村沢一雄大佐　右端軍参謀はぜ山徹夫少佐その左同じく並井朝輝中佐３列左から５人目歩兵第36連隊長田村檀一大佐　後列左から３人目第24師団参謀苗代正治少佐　同じく杉森實少佐　第62師団参謀北島等之中佐同じく柄瀬たける少佐



昭和20年夏頃（6月）先島集団幹部（於野原岳戦斗司令所）
左から山崎第28連隊機大佐　師団兵器部長牟田大佐　一瀬参謀長　独混第60旅団長安藤少将
集団長納見中将　独混第59旅団長多賀少将　陸兵第28連隊上田連隊長　歩兵第3連隊竹士連隊
長　歩兵第30連隊長富沢連隊長　後列豊島師団専属副官（1人置いて）　輜重兵第28連隊宮川
連隊長　杉本参謀　陸路参謀　工兵第28連隊外賀連隊長　三浦経理部長　浜高級副官　宮田獣
医部長独混第59旅団小梨副官（？）独混第60旅団富福副官（？）

石垣島を訪れた櫛渕集団長（昭和19年10月白保飛行場で）
左から脇田軍医部長　陸路参謀　櫛渕集団長　独混第45旅団長宮崎少将
三浦経理部長　旅団高級部員東畑広吉少佐（？）



宮古島進駐初期の第28師団司令部（昭和19年11月県立女学校正面玄関）
前列左から杉本参謀　陸路参謀　脇田軍医部長　福地参謀長　櫛渕師団長　三浦経理部長
走尾獣医部長　浜高級副官　角田主計少佐　2列目左から（2番目）堀江専属副官（4人目）
清野次級副官　山田軍医大尉（7人目）上田少佐（9人目）宮田獣医大尉（右端）外村少尉

宮古神社に戦勝を祈願する新師団長納見中将前列左から清野次級副官
陸路参謀　納見中将　浜高級副官　豊島専属副官　後列左から三浦経
理部長　脇田軍医部長　宮司本永玄位　池村光州　宮田獣医部長　上
田少佐　昭和20年1月

米機の猛爆で廃墟と化した平良市街（20年8月）（桟橋から撮す　上方は焼け残った宮古神社）

右　昭和20年9月に建立された陣歿勇士の墓（碑文は納見中将の揮ごうに成る）

左　戦後野原越に造られた日本軍将兵二、四〇九柱の納骨堂
今日でも6月23日の慰霊の日を期して祭祀が執り行なわれている。

20年9月7日嘉手納飛行場で行なわれた降伏調印式に出席する日本軍代表
左から杉本参謀　一瀬参謀長　納見第団長　奄美地区陸軍参謀独混第64旅団長高田利貞少将
奄美海軍防備隊司令加藤唯男少将

X

Headquarters Tenth Army

7 September 1945

Surrender

The undersigned Japanese Commanders, in conforming with the general surrender executed by the Imperial Japanese Government, at Yokohama, on 2 September 1945, hereby formally render unconditional surrender of the islands in the Ryukyus within the following boundaries:

30° North 126° East, thence 24° North 122° East, thence 24° North 133° East, thence 29° North 131° East, thence 30° North 131° 30' East, thence to point of origin.

納見敏郎
Toshiro Nomi
Lieutenant General
Commander Japanese Forces
Sakishima Gunto

高田利貞
Toshisada Takada
Major General
Commander Japanese Army Forces
Amami Gunto

加藤唯男
Tadao Kato
Rear Admiral
Commander Japanese Navy Forces
Amami Gunto

Accepted:
Joseph W. Stilwell
J. W. Stilwell
General, United States Army
Commanding

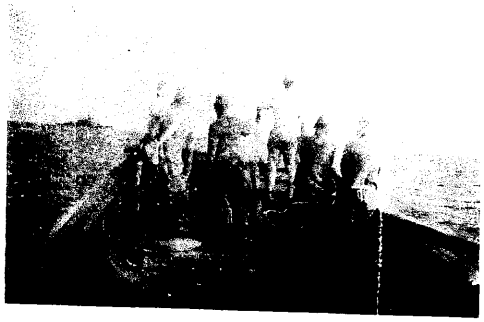
降伏調印書の全文　（下記は訳文）
於て第10軍司令部　　1945年9月7日
下記日本軍指揮官は日本政府によって調印署名された降伏文書に従い下記境界線以内の琉球列島を無条件で引渡すことを正式に認める　北緯30度　東経126度

先島群島日本軍指揮官	陸軍中将	納見　敏郎
奄美群島日本軍指揮官	陸軍少将	高田　利貞
奄美群島日本海軍指揮官	海軍少将	加藤　唯男

先島守備隊長　宮崎武之少将

初代の第32軍司令官　渡辺正夫中将
（昭和19年8月　参謀本部付）

歩兵第30連隊第1陣宮古島に上陸（昭和19年7月25日）



先遣隊を出迎える宮崎旅団長（右から二人目）その右隣参謀沖合は先遣隊を輸送した巡洋艦（昭和19年7月）

県立女学校に開設された師団司令部

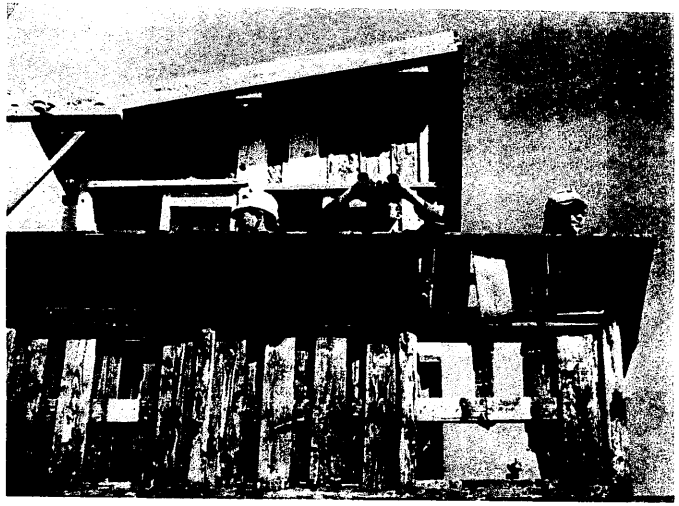
県立女学校正門

第32軍参謀長　長勇中将
（写真は在満洲歩兵団長少将当時）

第32軍情報参謀薬丸兼教少佐
（宮古島を数回訪れた）

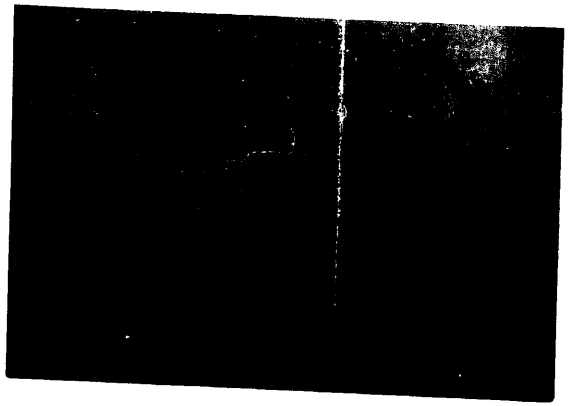
独立混成第59旅団　高級部員薮伊寿郎中佐
（写真は少佐時代）昭和16年満州ハイラルに於て

独立混成第60旅団　高級部員甲木誉吉中佐
（写真は少佐時代）昭和17年満州に於て

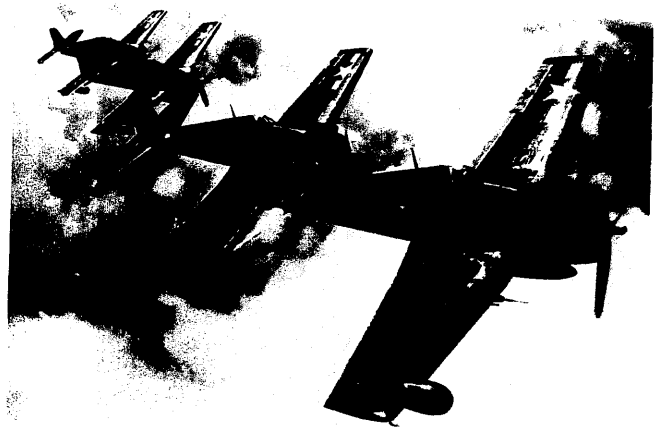


測候所附近に開設された対空監視哨

平良町南方海岸俗称トリバーに設けられた特攻艇秘匿壕



10/10空襲　女学校裏庭から炎上する海軍兵舎の方向を見る



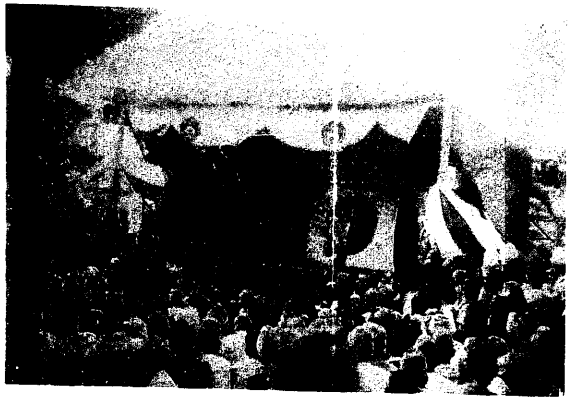
猛威を揮った米海軍グラマン戦斗機

独立歩兵第397大隊長
田島勇三郎少佐

壕掘りに精出す司令部職員

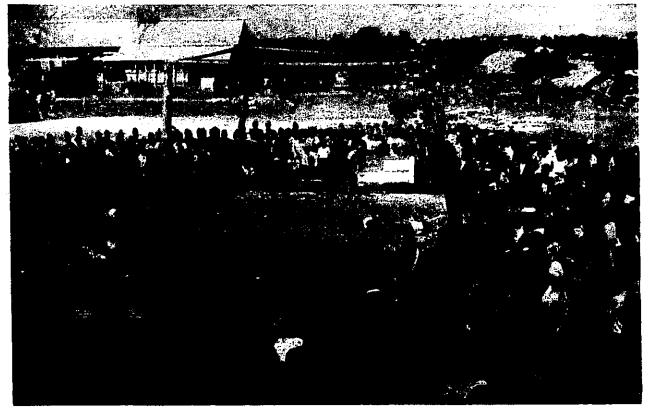
侍従武官坪島中将来島

侍従武官坪島文雄中将（27期）は19年10月16日台湾経由来島　柳渕師団長に聖旨を伝達所管事項について報告を受けた（写真は中飛行場に於て米機の残骸をみる左から陸路参謀　福地参謀長　坪島中将



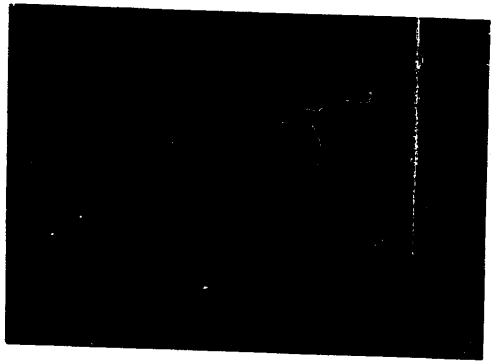
国民学校生徒による慰問演芸大会（19年11月3日）

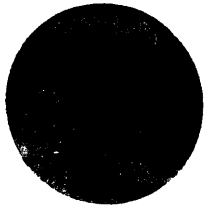
同じく一心亭美枝団による沖縄舞踊



明治節（11月3日）を祝って相撲大会（於女学校々庭）

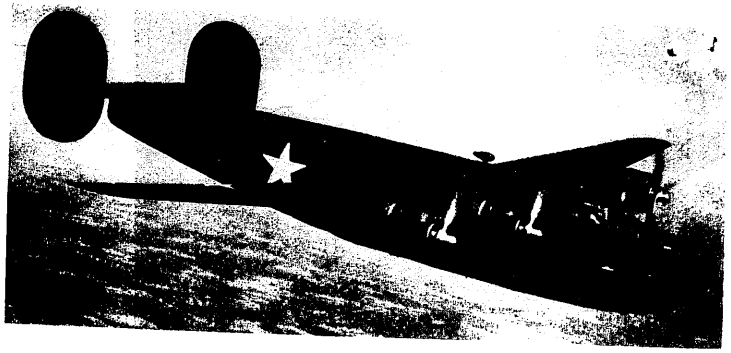
優勝者に賞品を授与する楢渕師団長





海軍警備隊司令
村尾重二大佐

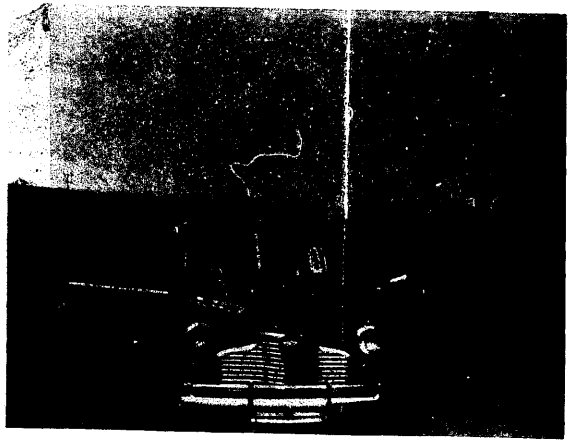
宮古島海軍警備隊司令村尾重二大佐（左から二人目）
左端軍医長曽我少佐右端から世良昌穂軍医中尉　師団
軍医部山田少佐



補給線を脅やかした米海軍コンソリデーテッドB24爆撃機

平良町パイナガマ南岸の機銃陣地

陸軍中飛行場戦斗指揮所壕開口部



栄転の福地参謀長宮古を去る　（20年2月）

新参謀長一瀬大佐着任

新任地へ出発する櫛渕中将（20年1月16日）

納見新師団長歓迎夕食会（平一枚の司令部）

左から浜副官　船田軍医部長　福地参謀長　納見師団長
三浦経理部長　陸路参謀　杉本参謀（20年1月）

最後の輸送船皇坂　大阪丸入港
（20年3月一日）
（ボー崎から敵機発見の白煙あがる）

沖縄特攻作戦戦艦大和の最後

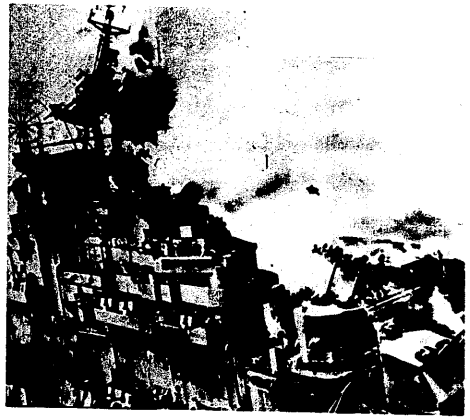
（上）米機の攻撃から回避する大和　手前は軽巡洋艦矢はぎ

（下）轟沈する大和（20年4月7日　九州南方海上）

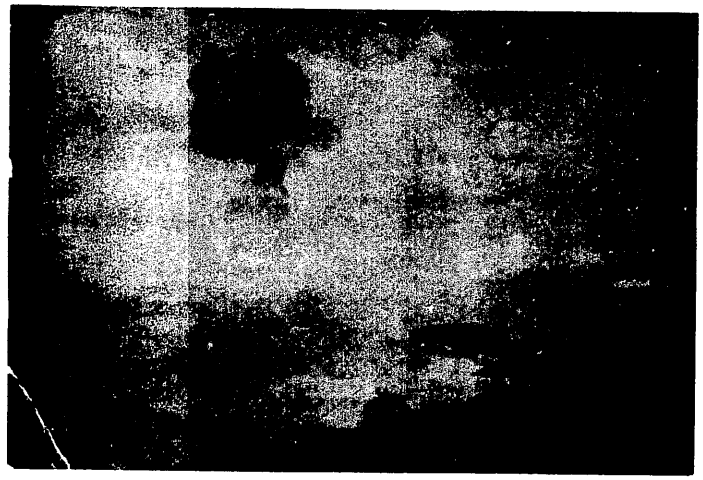
野原岳頂上よりかんした第回司令部（野原岳北側面）

左側手前から参謀長室　師団長官舎　参謀室　つづいて情報室　動員室　副官室　管理部　兵器部
炊事部　軍医部　経理部特校室　高級事務室　経理部長　経理部事務室などが並んでいる
遠くみえるのは佐川湾　佐川湾　与那浜崎

漢水港沖で撃沈された敷設艇ツバメ



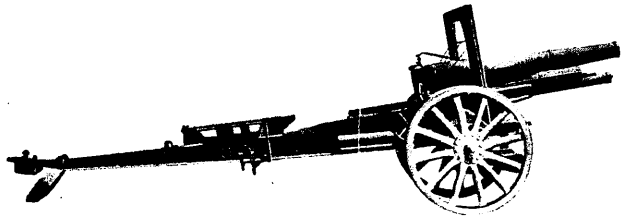
神風特攻機の急降下爆撃機は米大型空母「フランクリン」に体当り攻撃を敢行した　機機附近に命中した瞬間をとらえた生々しい写真（20年3月17日九州南方海上）



爆煙天に沖す宮古、漢水志　（20年3月1日）

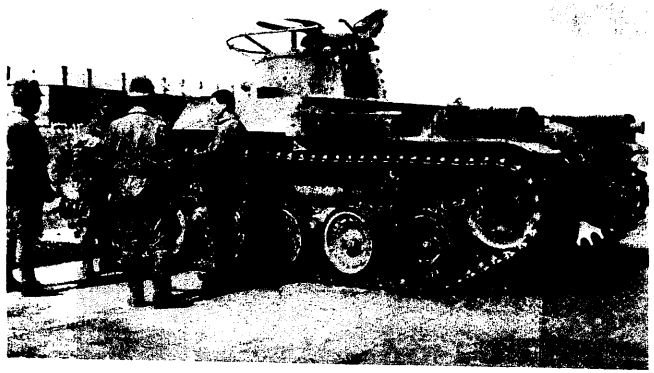
（写真上）　敵機の攻撃を受け瞬時にして轟沈する豊坂　大建丸
（左上方に敵機が見える）

（写真下）　右端は白煙を揚げて遁走する小型船



日本軍砲兵の主力 155 ミリ榴弾砲
宮古島には新式の九六式（昭和16年採用）が配備された　重量2.750キロ　最大射程9.600メートル

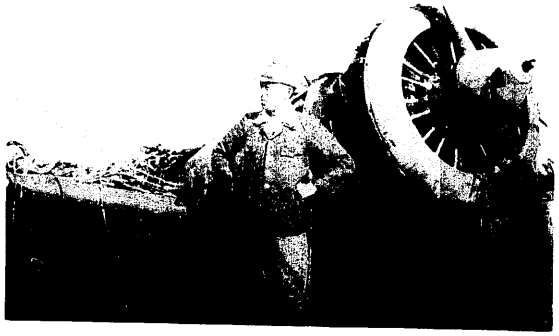
沖縄に上陸する米軍



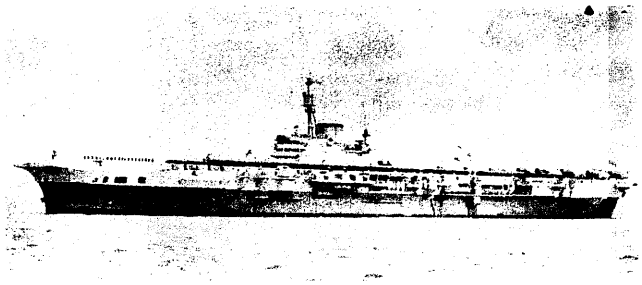
宮古島に配備された97式中戦車

日本全土を焼野原にした超空の要塞B29戦略爆撃機（全幅43.10米　全長30.18米　全備重量54トン　最大速度550キロ米　航続距離5.230キロ米）

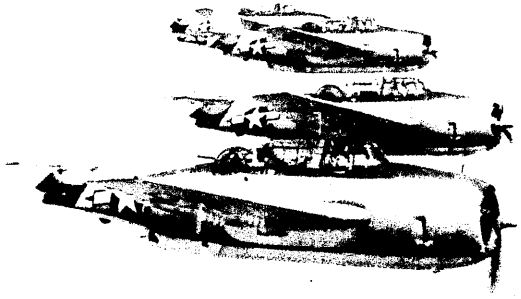
米護送空母「サンガモ」の飛行機甲板目がけて急降下した特攻機は突入直前高射砲撃撃されて、もんどりうって海中に落下した



米機の攻撃で破壊された日本軍戦斗機

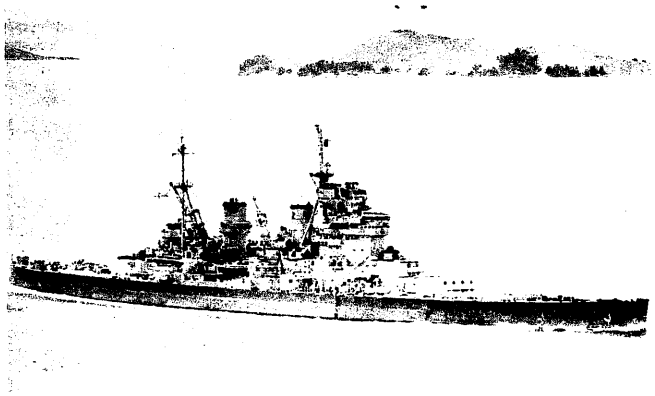


先島群島攻撃に参加した英空母インデフォティガブル

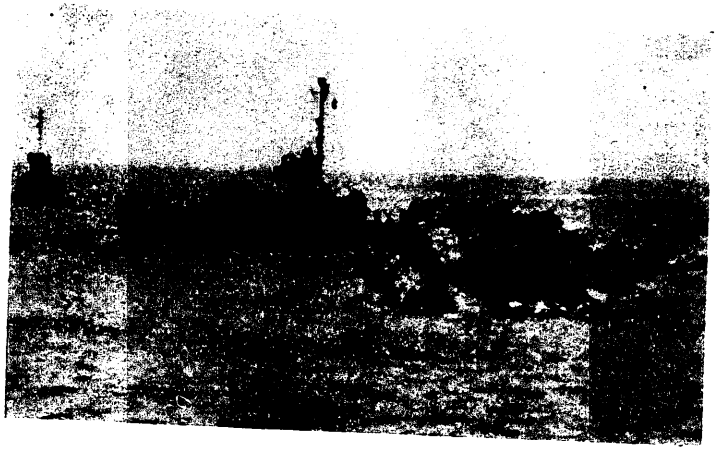


米海軍グラマン「アベンジャー」攻撃機

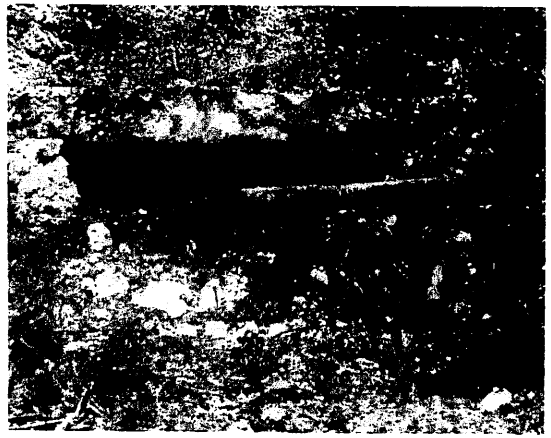
野原岳洞窟司令部入口（戦後撮す）



宮古島を艦砲射撃した英戦艦ホウ

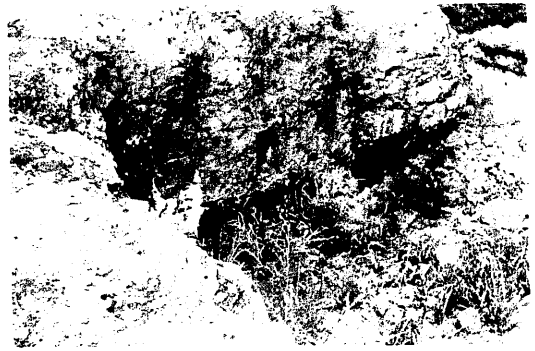


特攻機の命中を受けて沈みいく米駆逐艦ポーターター　（20年6月7日宮古島沖で）



偽装された15サンチ海軍砲

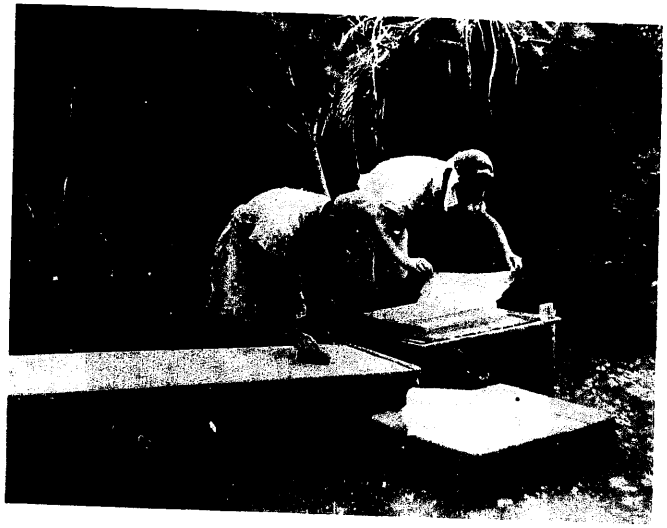
甘藷で作った代用食を試食する
（左から）一瀬参謀長　陸路参謀　海軍将校
右端宮川輜重兵連隊長



陸軍中飛行場の戦斗指揮所跡

精米作業場

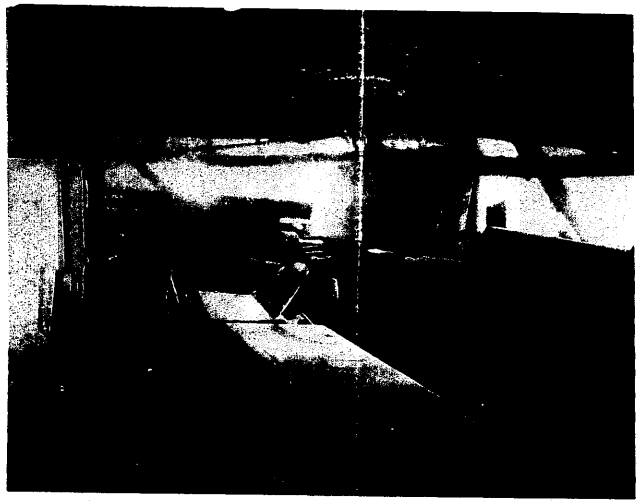
軍民力を合わせて食糧増産作業



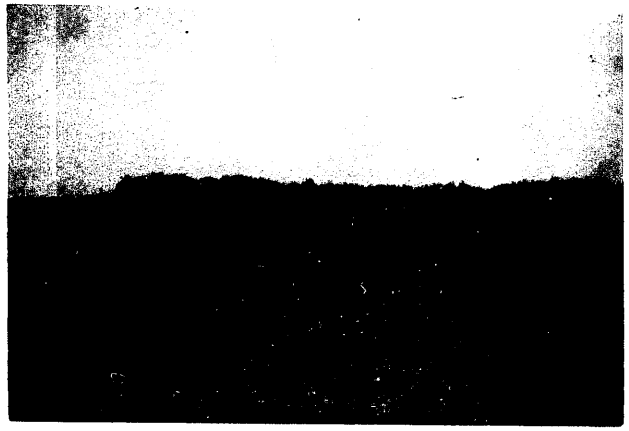
大野山林内の製材工場と製紙工場

南国名産パパイヤ

ウサギも食糧の一端



製紙工場風景



比嘉部落北方を飛ぶB24爆撃機

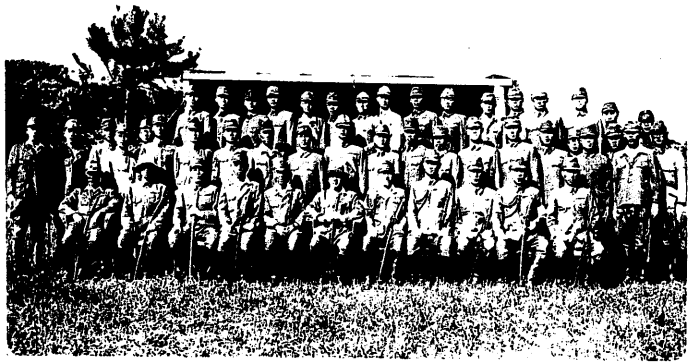
軍の織物工場で働く婦人

塩も自給で（伊良部）

マラリヤ対策について説明を受ける福地参謀長（左から３番目）
後姿は脇田軍医部長　（20年１月棚原部落で）

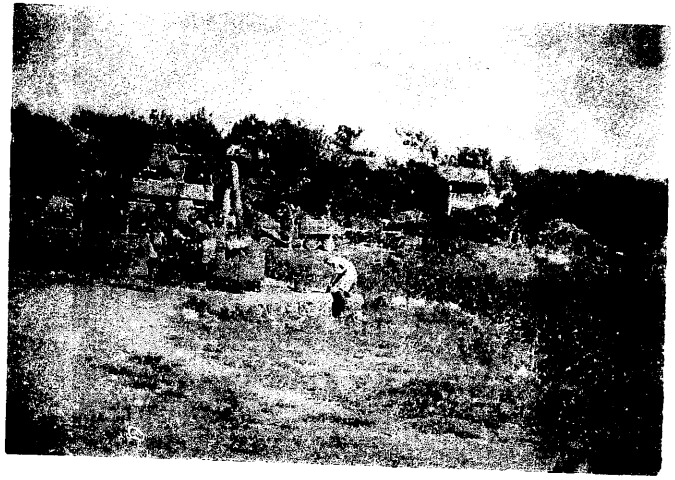
蚊の棲息地を一掃するための排水工事

野原岳司令所の納見師団長



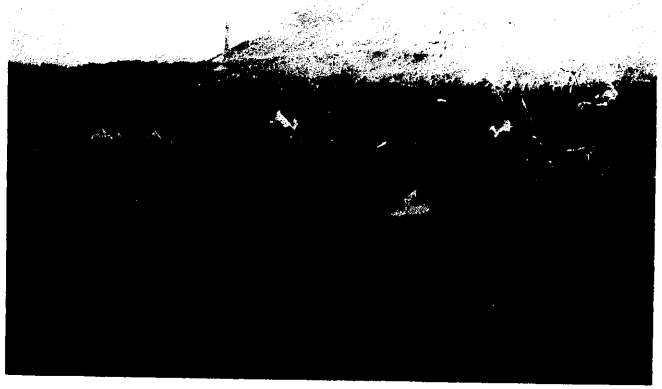
宮古島進駐１周年を迎えて師団司令部全将校の記念写真　（20年７月）

南静園長多田景義技師（真ん中の人）右端は脇田軍医部長

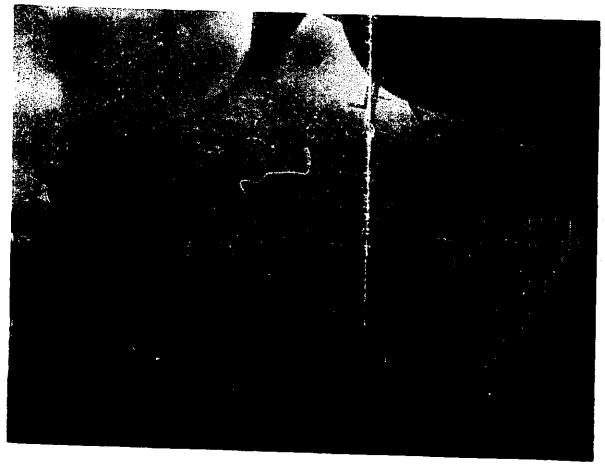


ウズラ嶺附近の掘り抜き井戸

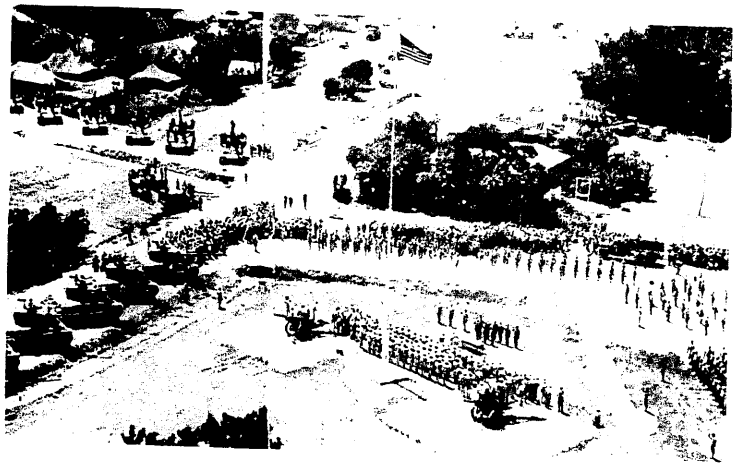
ウズラ嶺の洞窟病院入口



マラリヤ防あつに協力した台湾人軍属を表彰
（右から山田軍医少佐　脇田軍医部長　武田大尉　布施中尉）



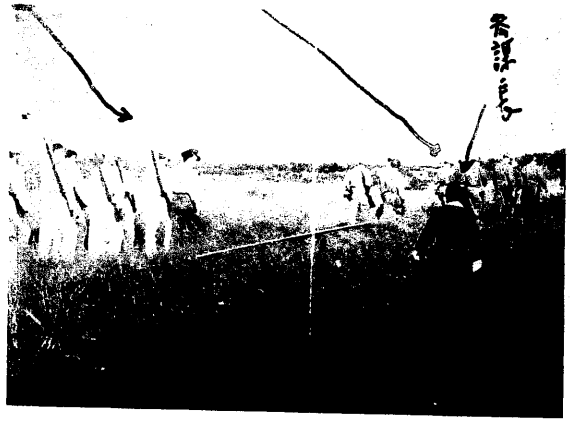
米軍第一陣乗込む（海軍飛行場）



9月7日米第10軍司令部前で行なわれた降伏調印式
（この式には南西諸島所在の日本軍を代表して第28師団長納見中将が出席した）

第4野戦病院（ウズラ嶺）の衛生指導へ向う軍医部将校

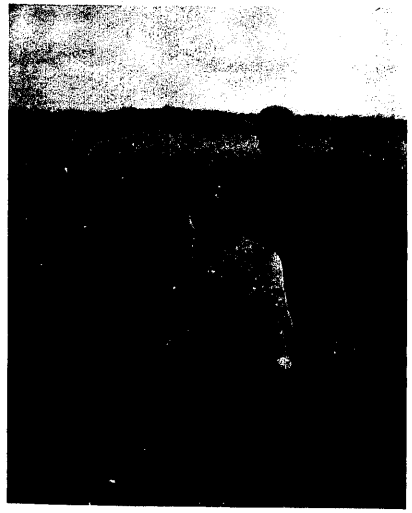
停戦交渉のため沖縄へ向う日本軍々使（左から一瀬参謀長
多賀少将　村尾海軍警備隊司令　杉本参謀）



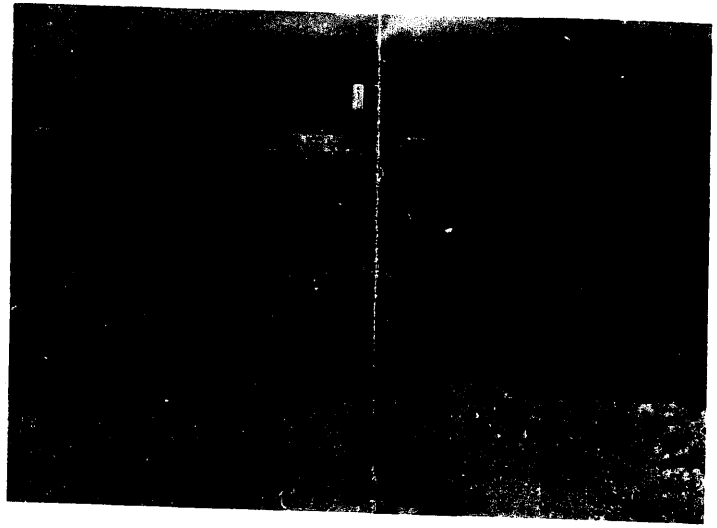
野原越に向う米兵（後姿は一瀬参謀長）

破壊された野原岳頂上の日本軍電探

連絡のため飛来した米輸送機

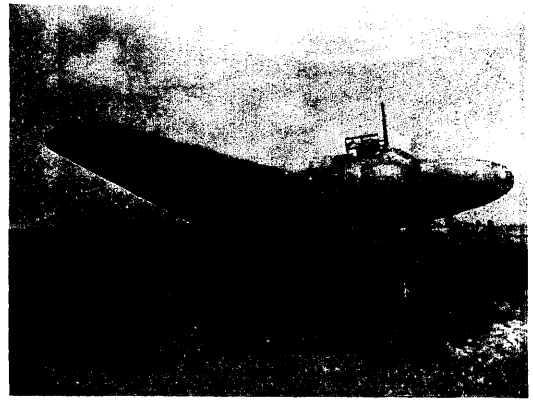


ラーセン大佐と松本通訳（海軍飛行場にて）



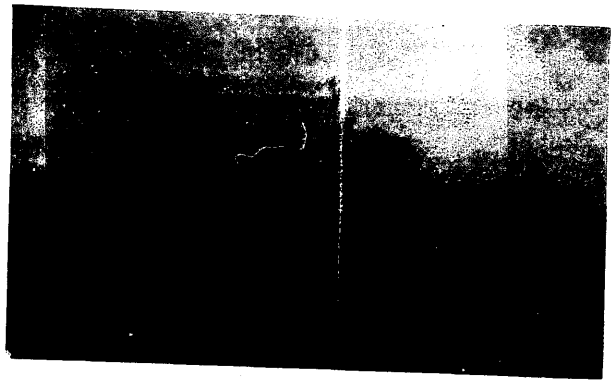
慰霊塔工事に従事する日本兵

軍民合同で催わう工兵隊の演芸会

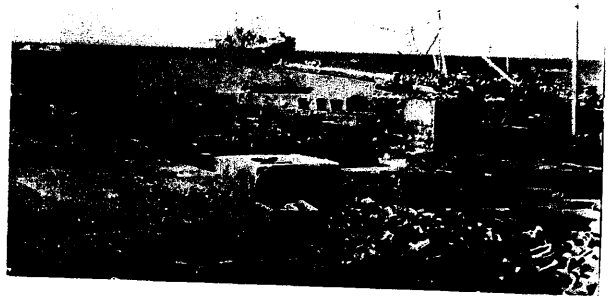


日本軍々使の塔乗機（海軍飛行場）

司令部の武装解除のため野原越に乗り込んだ米軍



復員第1号船海防艦192号



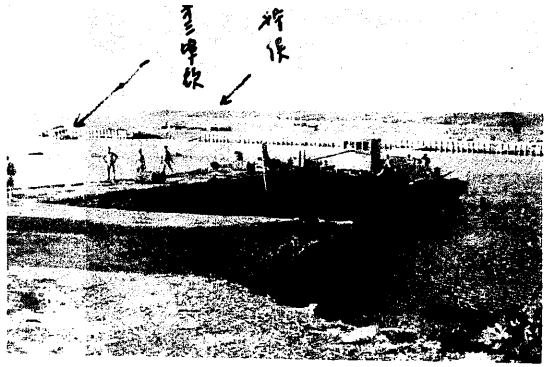
湧水港岸に山積みされた日本軍の兵器弾薬

米軍連絡所が設けられた宮古島測候所

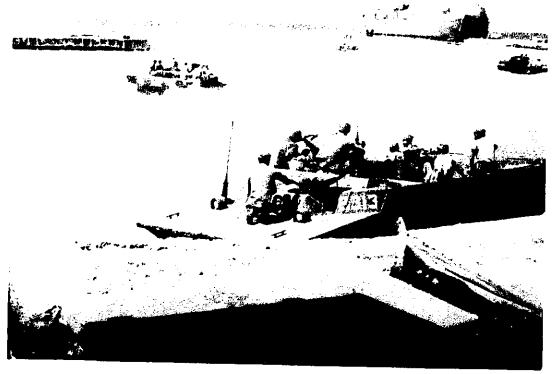
ニワトリ小舎を作る参謀部の将兵

米軍機で石垣へ派遣された山田軍医少佐（左は小山靖大尉）

兵器弾薬をＬＳＴに運ぶ日本兵



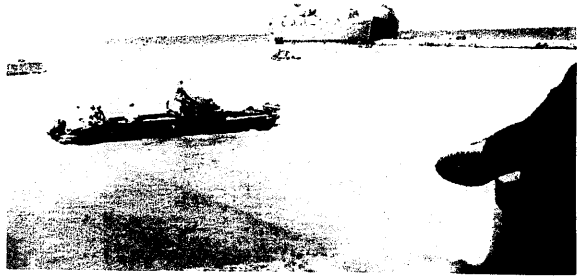
日本軍が築造した漲水港の桟橋



日米共同で荷役作業

在南支歩兵第41連隊長当時の納見中将（右端）向いは第5師団長中村明人中将

憲兵分隊長武田茂一大尉（左端）その次から桜井大尉　足立　山田大尉

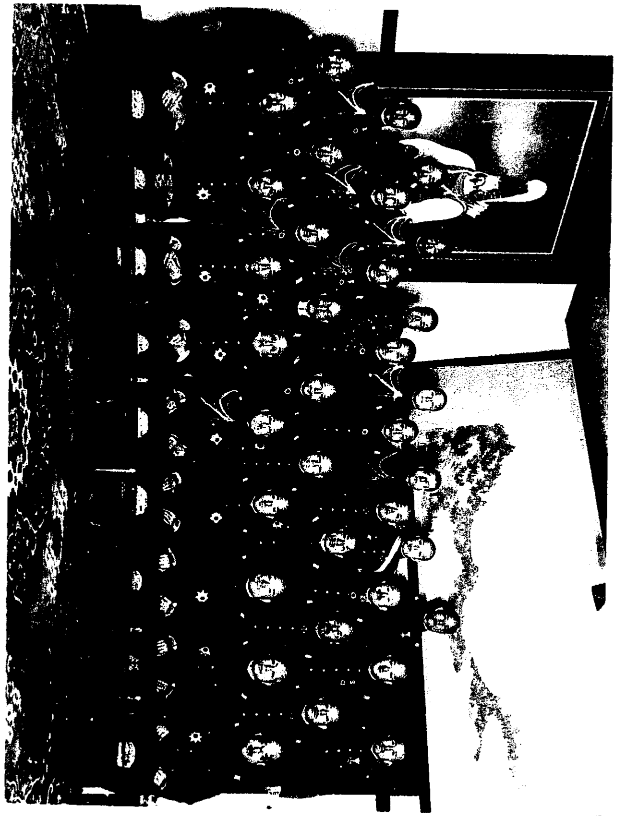


湛水港に入港したＬＳＴ（米輸送船）

ＬＳＴと野積みの日本軍の鉄帽

戦後の野原岳（右方の塔は米軍の電探ドーム）

吹きまくる台風（20年夏）



教育総監部庶務課長時代の納見中将

省部の将星と並んで（三列目右端から二番目）左端二人目から
中村孝太郎中将　東久邇宮　梨本元帥宮　閑院参謀総長宮　朝香宮
杉本陸相　梅津次官　小泉医務局長　二列目左から二人目　阿南人
事局長（のち陸相　敗戦後自決）同じく三人目参謀本部中島鉄蔵少将

戦前の黒糖製糖所（下も同じ）

空襲前の南静園全景

空襲で瓦れきの山と化した接橋一帯

荒涼たる潮水港一帯